史遊サロン通信

No. 270号
令和元年
5 月5日

編 集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新 井 宏

次の史遊サロンは六月一日(土)に変更です

次の史遊サロンの会を、前号で五月十八日(土)とお知らせしましたが、私の手配ミスで六月一日(土)に変更いたします。私を含めて、史遊サロン会員の多くが同人誌『まんじ』に参加していますが、次回の『まんじ』の例会がいつもの第四土曜日ではなく、たまたま第三土曜日に変更されていたのをすっかり失念していました。済みません。会場・開催時刻はいつもと同じく、銀座ルノアール八重洲北口会議室で三時開始で二時間の予定です。

歳のせいとはしたくないのですが、つい最近池袋で八十七歳の老人が車の暴走で、二人の方を死亡させ、十名の方を負傷させた大事件がありました。実は、私の計量史関係の知人でその日お会いする予定だったのです。元工業技術院院長をされていた方で、最近急に足の衰えが目立ち、無理をされなくとも良いのにと気遣っていたところでした。

私はその点、車の運転が出来なくて良いのですが、何かとミスが増えています。自戒せねばと思っていますが、史遊サロンも一段落、ほっとしています。

この二七〇号は、おそらく最終号になります。いままで原稿依頼や督促を全くせずに、続けて来ましたが、原稿が途切れることなく入り、とても有り難く思っていました。

さて最終号。いつも投稿されていた方はむしろ少なく、初めてとか久しぶりの方の原稿が多く十八頁になりました。史遊会通信が始まって以来特別号を除いて十四頁を超えたことがありませんので、最終号が一番分厚くなりました。嬉しいですね。

「令和」の幕開けですが、最初の印象は「冷和」に繋がり、「りょうわ」と読んだ方が良いのではと感じました。

万葉集は律令時代の真っ盛り、「令」を「りょう」と読むのが普通だったのではないかなどとイチャモンをつけています。

中近世史のことを書く時、史遊会では年号と西暦を併記するのを基本として来ましたが、私にとって、もはや「令和」と西暦を併記することはないだろうと思っています。

「史遊サロン」の三～四年間、余白があると朝鮮半島問題を書いていました。ポーランドと朝鮮半島の類似性を「地政学」などと言うキイワードでくくり、多少の緊張感を持ちながら、勝手に予測を繰返して来ました。

それが実に良く「当たる」のです。結局、朝鮮半島は「地政学」の呪縛から逃れることが出来ないのだろうか。日本としては、内陸国家のロシア・中国に対峙するとき、朝鮮半島を内陸国家側に引き渡す方が、むしろ自然なのかも知れない。それは一九五〇年に米国が示した、防共ラインを対馬まで後退させるアチソン・ライン構想の復活です。

今や、韓国の文在寅政権は、火だけ付けたまま何も出来ずに傍観している状態ですし、金正恩政権も軍資金が底をついて焦っています。気がついたら、朝鮮半島は中国に囲い込まれているのではないでしょうか。

（新井宏）

神田連雀町と武蔵野連雀新田

山本鎮雄

はじめに

「火事と喧嘩は江戸の華」と言われてきたように、徳川幕府の江戸市街地では二六七年間、大火は四十六回も発生したと言われている。俗に「振袖火事」（一六五七[明暦三]年正月、三ヶ日間、火元は三ヶ所）と言われた大火は、本郷丸山町の本妙寺の施餓鬼（せがき）の時、亡くなった三人の娘の供養のために、本妙寺の僧侶が読経し、焚いた振袖を護摩に投げ入れた。火の付いた振袖が突風に煽られ、天井に舞い上がって、本堂を炎上した（大火その原因については諸説がある）。

この時期、江戸の市街地は八十日間以上も雨が降らず、空気が完全に乾燥し、朝からの強風（空っ風）に煽られ、火は板葺の屋根や外壁、木造の建造物を全焼し、江戸市街地の三分の二を燃焼した。のちの「明和の大火」（目黒行人坂の火事）、「文化の大火」（芝の車町火事、牛島火事）と比べて、江戸の三大大火の一つで、最大の大火といわれている。

それを機会に老中の松平伊豆守信綱は江戸の市街地の 復興と市外地への移転という大規模な都市改造に着手した。

「べらんめえ、江戸っ子は宵越（よいご）しの銭（ぜに）は持たねえ」という気風（きっぷ）のいい台詞は、江戸の職人、町人、町火消の威勢の良い啖呵（たんか）だが、稼いだ金銭はその日のうちに使い、金銭に執着しないことを意味する。確かに、頻発な火事によって金銭、家屋、家財道具の一切を失い、それに宿命づけられていた江戸っ子の自棄（やけ）のやん八（ぱち）の身上（しんじょう）であろう。

徳川家康が征夷大将軍になって江戸幕府を開府して以降、江戸は人口が急増し、市街地も急速に拡大し、ロンドン、パリ以上に世界一の巨大都市へと急激に変貌した。過密な木造建築物の都市構造、頻繁な火災によって延焼面積は拡大した。江戸と大火、緊急な防火対策と大規模な都市改造などは、江戸幕府を中心とした幕藩体制の存亡にかかわる大問題であったに違いない。以下では、「振袖の大火」とそれ以降、幕府老中の松平伊豆守信綱による江戸の吉祥寺とその門前町、神田連雀町の火除地（ひよけち）の指定と、町民の茅や灌木が生い茂る荒地（武蔵野茅場千町の一角）への集団移住について記述し、荒地を開墾した武蔵野井の頭、武蔵野連雀新田の草分け名主や百姓を中心に、それ以後の労苦を偲ぶことにする。

一 明暦の大火

「振袖の大火」は本郷、湯島、駿河台、神田橋をはじめ、江戸城本丸、二の丸、三の丸、天守閣を延焼し、江戸城内外の大名、旗本、御家人などの武家屋敷のほか、町屋、神社仏閣、遊郭、橋梁などを類焼した。その結果、焼死者は少なくとも十万人以上に及び、その後、両国回向院を建立し、埋葬したといわれている。

徳川幕府の四代将軍家綱は、大火直後の被災者への厳冬対策として救小屋（すくいごや）を設け、粥（かゆ）の施行（せぎょう）をして救済した。この大火を契機に、大規模な都市計画を実施した（それは、すでに計画されていたが、何ら実施されなかった）。諸大名の藩邸、旗本、御家人、武士の武家屋敷の引き替え（交換と移転）と再建をはじめ、神社仏閣の移転と再建、焼失した橋梁の建造、火除地（ひよけち）や火除堤、広小路の新設などの大規模な都市改造を行った。火災の延焼を防ぐために火除地を設け、空き地にし、そこに住む住民を強引に立ち退かせた（のちに、町火消の制度が整い、火除地に

仮設の掛け小屋を設け、芝居、講談、落語、大道芸の見世物小屋として利用された)。

さらに幕府直属の若年寄の支配下に防火、警備を司る組織的な消防組織、大名火消のほか、定火消（じょうびけし）の制度が創設された。武家地の高台に建てられた定火消役の屋敷には高さ五間の見晴し台に火の見櫓が設けられた。櫓には定火消が日夜監視し、大太鼓をぶら下げ、四隅に半鐘を吊り下げ、それを打ち鳴らして火災の発生を知らせた（八代将軍徳川吉宗の時、町奉行の支配下に町火消が創設された)。

明暦の大火は、江戸の町人（職人と商人）を武蔵野に集団移住させ、新田開発を行うきっかけとなった。例えば、神田連雀町（万世橋の神田川右岸、神田須田町、神田淡路町の三角地）には振売（ふりうり）商人と、住屋を仕事場にする居職人（その反対は大工、左官などが仕事場に出向く出職人）という町人が住んでいた。神田川の川岸以南（内神田）には鍛冶職人（鍛冶町）、大工職人（大工町）、藍染職人（紺屋町）などの職人町が連なっていた。そのうち、神田連雀町は天秤棒（てんびんぼう）と背負子（しょいこ）の運搬道具をセットにして作る居職人の町だった。

二 牟礼と井の頭池

現在、井の頭池を含む井の頭公園は東京都三鷹市の北部に位置している。豊かな水に恵まれていたため、井の頭とその近辺には旧石器時代以降の遺跡や竪穴式の住居跡が発掘されている。その周辺の集落は「牟礼」（むれ）と称され、徳川家康の関東入府以後、徳川幕府と大名の直轄地とされたが、その大部分は未開墾であった。猛将の柴田勝家の孫の柴田勝重は大阪の役の恩賞により、武蔵野国の新川、中仙川村などの知行地を加増され、陣屋を設け、以後三代にわたって開墾した。その後、柴田家は三河の地へ転封され、同地は徳川幕府の直轄領とされた。

牟礼は雀などの鳥類が採餌、繁殖、集団防衛のために、群（むれ）をつくって生存するように、私は人が群がって集落を形成するものと単純に考えていた。ところが、水資源に恵まれた埼玉県南部の高麗（こま）町や東京都狛江（こまえ）市などは、朝鮮半島の渡来人が定住した集落である。さらに『大日本地名辞典』（吉田東伍著、一九〇七[明治四〇]年脱稿）によれば、「井の頭池は、今、武蔵野村の牟礼に在り」と記述されている。そこで、井の頭池は古くは「牟礼の池」と称されたと推察される。

牟礼は朝鮮語でMora（山）、Mur（水および川）を意味する。井の頭池の周辺の「山」は現在の三鷹市井の頭町と牟礼町、武蔵野市吉祥寺町、御殿山町にという地名に照応し、また「水」および「川」は井の頭池という地名に照応する（中島利一郎著『武蔵野の地名』一九六六[昭和四一]年)。

徳川家康が入府し、関東一円を巡視して井の頭池に立ち寄り、その水が清冷で甘美のため、当地で御茶を立てた。その時、利用した石製の茶臼は今でも保管されている。家康は井の頭池から湧出する良質な水を江戸城に運ばせ、御茶に飲用し、水源が涸れないようにと、天台宗の僧侶の慈眼大師に頼んで水加護の護摩修行をさせた。

その後、三代将軍家光は井の頭池の周辺まで一本の辛夷（こぶし）の木の股に帯刀の小柄（こづか）で「井之頭」と彫ったという。家光はこの地を鷹狩、猪や鹿の狩猟のために来訪し、見晴しの良い高台に館（やかた、御殿）を建造し、その高台の周辺を御殿山と称した（現在、東京都武蔵野市の町名)。

井の頭池は池底から盛んに湧水する渦巻が七か所もあることから、「七井の池」と称された。家光は「この水は江戸数万人の喉を潤すものであるから、これは江戸の中の井の頭である」と言った。井の頭池は江戸周辺の水源池よりも水質が最も優れているので、その地名が付けられた（村尾嘉陵著『江戸近郊道しるべ』一八一六[文化三]年底本の現代語訳『江戸近郊ウォーク』の「井の頭」）。

井の頭池は井の頭上水、その途中の中流で善福寺川、妙法寺川と落合（おちあい、合流、東京都新宿区の町名）、面影（おもかげ）橋の下の周辺で、その水流は勢いを増した。面影橋の近くにある姿見橋（諸説がある）は、人の姿の全身を映す鏡のように、その周辺の河川の水は透明に澄んで見えた。その一帯の河川の水は蛍の繁殖と生殖に適し、江戸の庶民には夏の夕べの蛍火と蛍狩りの名所だった。

目白台の下の中流（その地点から江戸川）では海水の遡上を防ぐために、大洗堰（おおあらいせき）が建造された。石造りの堰で神田上水の水量を調節し、飲用水として江戸市街地の武士や庶民に供給された。その残りの河水は江戸川の下流の神田川に流された（一九六五[昭和四〇]年の河川法の改正で、旧井の頭上水や神田上水を含めて、すべて神田川と称するようになった）。

神田山を崩して平地とするのと前後して、神田川は江戸城の外堀として掘削された。「水道育ち」、「水道の水で産湯を浴びた」と言って生粋（きっすい）の江戸っ子は、神田上水（や玉川上水）の「水道の水」で産湯を使い、常時飲用したことを自慢した。生粋のロンドンっ子が、I am born within the sound of Bow bells.（私はロンドン市内の教会のボウ鐘を聞いて育った）と自慢して言ったのとおそらく同じことであろう。

三　井の頭の弁財天

江戸時代のはるか以前に井の頭池の南側に弁才天の祠（ほこら）が設けられたが、鎌倉時代末期の元弘の乱で新田義貞と北条泰家の合戦に巻き込まれ、弁財天堂は焼失した。弁才天はヒンドゥー教の女神のサラスヴァティーが仏教に取り込まれ、日本では神道にも取り込まれた。日本の弁才天は七福神の一つとして、のちに財宝の神として信仰された。そこで、弁才天は弁財天とも称するようになった。弁才天信仰は奈良時代に始まり、神仏習合を受容して観音信仰を許容した。さらに水の神として泉、池、島、港湾の入り口などに弁天社や弁財天堂を祀り、庶民に弁天様といって親しまれた。

井の頭池は江戸の武蔵野三大湧水池と呼ばれた。上流の井の頭上水、さらに善福寺川水源の善福寺池、妙法寺川水源の妙法寺池には、弁財天堂か弁天社が設置されている。徳川三代将軍の家光は井の頭が江戸の庶民の水源として弁財天を祀り、焼失した弁財天堂を再建し、同時に弁財天堂の周辺に桜樹百本を植樹した。

のちに、弁財天堂の管理のために、明静山圓光院大盛寺（平安時代に建立された天台宗の調布深大寺の末寺）が建立された。現在、井の頭の高台にある大盛寺から坂道を下ると、弁財天堂に着く。そこでは修行中と思われる坊主が霊験あらたかな御神籤やお札、御朱印を販売しているのを見かけた。

弁財天は井の頭池の水の恩恵に与かる江戸庶民、とくに神田、日本橋周辺の町人は篤く信仰した。信者は参詣や寄進などをする講という団体を組織した。とくに江戸や近在の紫染問屋やその職人の親方などの同業者は豊富な水と紫染の原料の貴重な江戸紫根に感謝し、灯籠、鳥居、標石、狛犬などを寄進した（それらのうち、寄進された二基一対の紫灯籠は染料史上の重要資料だそうである）。

四 武蔵野の連雀新田と吉祥寺新田

神田連雀町の職人や商人は、老中の松平伊豆守信綱によって火除地として一切を没収され、その代替地として幕府直轄地の武蔵野茅場千町野の一部を「代官見立て新田」として与えられた。彼らは茅や灌木が生い茂る荒地に集団移住し、武蔵野連雀新田を開墾した（後に、寛文年間の検地で正式に下連雀村と命名とされた）。

連雀新田では、屋敷地（五畝一〇歩）はすべて平等に、さらに草分け名主の松井治兵衛は七町歩余り、二十四戸の百姓には一戸当たり約四町歩余りから五町歩余りの土地を与えられた。その後、新田検地に際して、幕府直轄地の代官の野村彦太夫のもとで名主や百姓の土地の「縄延び」が大幅に黙認され、その結果、過酷な年貢納入の際には多少の恩恵を受けたと推測される。

明暦の大火の後、本郷元町の曹洞宗諏訪山吉祥寺（きっしょうじ）は、火除地に指定され、本駒込に移転した。その門前町に住む商人、職人は現在の武蔵野市吉祥寺町の一角に集団移住した。名主の十郎左衛門は吉祥寺門前町の周辺の長屋に住む浪人の宮崎甚右衛門などと相談し、武蔵野吉祥寺新田に移転し、町民とともに荒地を開墾した。吉祥寺は本駒込に移転したため、武蔵野市吉祥寺町には吉祥寺という名称の寺院はない。

ただ、吉祥寺門前町に住む町人は吉祥寺という地名を受け継ぎ、移転先の地名を吉祥寺と称した。その際、計画的に土地を道路の両脇を短冊型に「新田割り」した。吉祥寺には新義真言宗安養寺、曹洞宗月窓寺、日蓮宗蓮乗寺、浄土宗光専寺の四軒が開基された。その後、寛文四（一六六四）年に実施された検地では、吉祥寺村の総戸数は六十四戸、神社と神地のほか、四軒の寺院の檀家は平均すると約十六戸となる（今でも四軒寺というバス停車場がある）。

「連雀」（連尺、連着ともいう）とは、肩にあたる部分を麻縄などで組んで作った荷縄（にないなわ）をいい、さらに荷物を担ぐ天秤棒（てんびんぼう）と背負子（しょいこ）をいう。天秤棒を担ぎ、背負子に荷物をくくり付けて行商して歩く商人を「連雀商人」という。中世後期には連雀商人の活躍が盛んだったが、安土桃山時代の大名は領国支配のために、山城ではなく、政治と経済の中心地として平城を築いた。その城下に定期市が設定されるようになった。さらに社寺門前、街道の宿場で月に数回の定期市で商店を構える商人と、その周辺の路上で商品を担いで販売する連雀商人がいた。

近世になると、商品流通が発達し、人が集まる城下町、宿場町、門前町などでは商品名を大声で叫んで売る振売と天秤棒を担いで魚、野菜などを売り歩く棒手振（ぼてふり）の行商人が活躍するようになった。それと同時に、城下町では商店街が形成されるにつれ、各地を行商して歩く連雀商人は次第に消滅した。それでも、江戸へ転入した行商人（連雀商人）は商品名、例えば、「金魚や、金魚」と独特の声を上げて品物を販売した。

今でも浜松、静岡、川越、岡崎、高崎、甲府などの古い城下町には連雀町、連雀小路という地名が残っている。江戸・東京の神田連雀町は次第に縮小され、さらに昭和時代のはじめにその地名は消滅したようである。今、地図を見ると、神田連雀町と言うバス停留場があり、しかも旧神田連雀町の一帯は第二次大戦の戦災を免れ、今では昭和時代の面影（おもかげ）を残している。

昭和レトロの趣味人には格好の探索地であり、散歩道であろう。池波正太郎は行きつけの手打ち蕎麦の「神田まつや」、洋食屋の「松栄亭」、しる粉屋の「竹むら」、さらにあんこう

鍋の「いせ源」などの老舗（しにせ）を食べ歩いた（池波正太郎著『散歩のとき何か食べたくなって』，『江戸切絵図散歩』など）。スマホで検索すると、今でもこの旧神田連雀町界隈には老舗の食べ物屋があって、美味しいものに出会える江戸と明治以降の「グルメの聖地」だそうである。

五　武蔵野の上連雀村と下連雀村

明暦の大火で神田連雀町は火除地（空き地）に指定され、当地で商店、仕事場、住屋、長屋の再建は認められなかった。そこに住む名主の松井治兵衛など二十五戸の町人は武蔵野台地の原野に集団移住した。代替地は中央の通りの「連雀通り」（今は拡幅されているが、自動車道としてはやや狭い）の両側の広い平坦な土地を短冊状に区画した。

井の頭を含む古い牟礼村などは、水と地質という自然環境に恵まれ、歴史的には（江戸時代以前）「古村」である。三鷹市の「古村」はほかに、水に恵まれた上・中仙川村、大沢村がある。それらの「古村」と比較すると、「明暦の大火」で神田連雀町の表通りの表店の商人や居職人、裏通りの狭い路地を挟んで裏店の連雀商人や出職人の長屋は全焼した。すでに触れたように、当地は火除地として召し上げられ、彼らは集団移住した百姓に与えられた、荒地を新田として開墾し、歴史的には「新古村」である。

それにたいして、上連雀村は検地以前、武蔵野連雀前新田といわれ、連雀新田の下連雀村よりも多少遅れて開墾された。そこで、連雀前新田は、歴史的には武蔵野新田の「新古村」に比べて、「新新村」である。寛文四（一六六四）年、武蔵野新田が代官の野村彦太夫によって検地され、その機会に連雀新田の「新古村」にたいして、連雀前新田は下連雀村と称された。

ただ、上連雀前新田は新田開発の種類として、有力な名主が幕府の許可を得て行う「名主請新田」である。武士の身分を捨て、名主として武蔵野関村(現、練馬区関町）に土着した、井口家の先祖は、連雀前新田と称して新田開発に専念した。武蔵野新田の内、井口家は開墾した関村以下の十二か村の総名主となり、その内の大宮前（現、杉並区）、関前（現、武蔵野市）、連雀前（現、三鷹市）の開発新田には、井口家の一族が名主として指導的役割を果たした。

徳川幕府八代将軍吉宗は享保の改革を実施し、幕府財政の再建を計るとともに、新田開発を励行した。数多くの武蔵野新田の名称を整理するために、享保の中頃に京都に近い西方の連雀前新田を上連雀村、江戸に近い東方の連雀新田を下連雀村と称するようになった。上連雀村は、下連雀村の「代官見立て新田」とは異なり、上連雀村の代々の名主の井口権三郎が幕府（あるいは代官）に石高千石を年貢として直納し，農民でありながら苗字帯刀という士族並みの身分上の特権を得た。

下連雀村と比べて、名主の井口権三郎は上連雀村の草分け百姓に縄延びを制限し、そのため石高を多めに設定した。さらに牟礼村と下連雀村の間に狐久保という上連雀村の飛び地がある（現在の町名は三鷹市下連雀町、連雀通りと吉祥寺通りの交差点に 狐久保という道路信号機の標示がある）。この狐久保の飛び地に草分け百姓六戸が開墾し、その際、縄延びがなかったと言われて来た。

おわりに

戦後、均分相続のために、私の父とその兄弟姉妹が狐久保の土地を実測したところ、実測面積が公簿面積よりも多かった。狐久保の縄延びに関して、宍戸幸七著『三鷹の歴史』および三鷹市編集『三鷹市史』の記述とは異なることが判明し、多少の縄延びがあった。名主の井口権

三郎は狐久保の面積や坪数を厳しく測量しようしたが、名主と実際に土地を測量した草分け百姓との利害と葛藤があったことを物語っていると推察される。

多分、私の先祖は武蔵野の上連雀村の飛び地、狐久保の草分け百姓である。今でも、私が幼い頃、祖父の葬儀を井の頭の菩提寺の大盛寺で執り行われたことを記憶している。私の父の名は吉右衛門で、後継ぎではない五男の父は狐久保を離村した。父は祖父から「吉、吉」（きち、きち）と呼ばれ、可愛いがられて何かと面倒を見てもらったようある。

私の三男の兄は自由な天地のブラジルに憧れ、大学を卒業すると、農業研修を受けた後、農業移民として横浜港から移民船に乗り、ブラジルに渡った。最後にサンバウロ市の日本人街で宝石を研磨して自由に暮らしていた。

高齢の父は独身の兄を帰国させるために、日本語新聞の『サンパウロ新聞』で帰国を呼びかけたが、兄は交通事故に遭い、無惨にも即死した。父は長男の兄に遺骨の拾得のために、急遽ブラジルに赴かせた。

早速、父は三男の息子を供養するため、三鷹市牟礼にある大盛寺の別院に墓地を求めた。墓地は三鷹市にゆかりのある詩人、童謡作家の三木露風の「赤とんぼの墓」と背中合わせに造った。これで、五男の父の山本家は私を含む四兄弟のご先祖となった。

山本家の先祖は江戸時代に武蔵野上連雀村の飛び地、狐久保新田を開墾した。先祖代々、江戸中期から明治、大正、昭和前期にかけて、苦労して営々と農業を営んできた。戦後の均分相続、さらに均分相続によって、私は狐久保のごく狭い土地を相続した。先祖代々の労苦を思うと、井の頭公園に接した最適な住宅地を徒（あだ）や疎（おろそか）にすることは出来ない。ところが、不動産業者がこの土地に目を付け、盛んに郵書やメールを送ってくる。だが、今や 老齢の身の私はどのように有効に活用出来るのか、展望は見えてこない。

ただ、私は、この世の「石碑」ではなく、「紙碑」として、狐久保の土地の由来について記した。今、私は先祖の由来を尋ね、代々の労苦を明らかにすることが出来なかったが、それでよしとしたい。

二〇一九(平成三一)年　春の彼岸の日　脱稿

拉致問題からみえてきたこと
（平成時代を振り返って）

宇野正雄

今から四十一年前に北朝鮮に拉致され、幸いにも十七年前に帰還できた地村保志さんは福井県小浜市の出身で私の母校（若狭高校）の後輩である。彼が拉致された海岸（夏以外は人影少なく閑散としている）には私は散歩で何度も足を運んでいたこともあり、自分にもある時機、拉致の危険性が迫っていたと思えば、この問題は他人事ではない。安倍総理は解決に向けてトランプ大統領に「よろしく」と頼んでみたが金正恩は、「あの問題は解決済み」とニベも無い返事をした由である。

今や安倍総理自身が動かざるを得ない情況にあるが、この先、解決への道筋はみえていない。平成の時代に日本の対外問題で顕著になってきたのは、「ロシアからの北方四島返」と「沖縄の米軍基地闘争の拡大」である。最近、これらの問題と拉致問題にはある共通項があることに気が付いたが、それは後述する。

さて、平成時代を昭和時代と比較してみるとき、平成は戦争の無い平和と、深刻な平和

ボケの進行だったのではないかと思う。この三十年間に国際情勢は大きく変わった。平成元年には米ソの冷戦が終結し、民主主義・全体主義のイデオロギー闘争も民主主義に軍配が上がり終息した。この間、中国が経済・軍事両面で勢いを増し米国と比肩するまでになった。最近では東アジアでは朝鮮半島統一の動きや中国の日本への接近等、明らかに潮目は変わりつつあるのに日本は今後、どう対応して行くのか、先行きは不透明である。平成時代の平和は、安保条約（日米同盟）に安住できた結果であるが、そろそろ、そのツケが廻ってきたのではないかと思う。

ところで、日米安全保障条約（安保条約）第六条に基づく地位協定、別称、軍事協定という条約がある。この条文には米軍の施策・行動に関しては、トランプ大統領に決定権があって日本は口を差し挟むことができないとある。同じような条約は第二次世界大戦で敗れ、戦後は日本と同じような立場におかれたドイツにもあるが、ドイツのそれは主権を重んじる条項があり、米国はドイツ政府の同意なくしてコトを前に進めることは出来ないことになっている由である。

この文脈で拉致問題をみると、「検証可能な・・・完全な核廃棄」を日本はトランプと同じトーンでオウム返しに言っている限り、膠着状態は長引くであろう。北朝鮮に核を廃棄させるには経済制裁以外の手は無しとする米国の方針には従うにしても、日本は別の動きができないものか。

人道支援や文化交流等、間接的にでも経済復興の一助になると金正恩に思わせればいいのだ。プーチンの場合は、「日本に四島を返還すれば米国がロシア本土に最も近い処に軍事基地を造りたいと言い出しても、それに日本は異議を唱えることは出来ない。ロシアにとっては危ないことだ」、と思っているに違いない。

彼らは、今の日本は事実上、米国の一州と同じとみているのである。米国の顔色を窺いながら行動するのは、まるで主人の顔を見て尾っぽを振る犬である。その習い性の拠って来たるところは日米地位協定に起因するのではないか？　ひと頃〝安保反対〟で大騒ぎした人達は平和ボケの進行のなかで静かになり「安保音痴」になってしまったのか。私は昨今の国際情勢下、日本の安全は米国の軍事力によって守られると思うので日米同盟には反対はしない。然し、これから始まる令和の時代は、日本が今後、東アジアで独自路線を歩み、南北朝鮮問題では米・中の間に立って行動することが世界から求められるような予感がする。

そのためには、先ずは地位協定の見直しは必須であろう。それは、憲法改正問題と不即不離の関係にあって様々な困難が予想されるが、先に挙げた問題を解決するは避けて通れない道だと思う。憲法改正問題についても私自身、頭が平和ボケになっていることを念頭に対応しなければならないと自戒している。

（了）

非運の武将―今川義元―

中島　茂

圧倒的に優勢な兵力で尾張に侵入しながら、桶狭間の戦いであえなく敗死した今川義元は、これまで戦国大名としての人気も評価も低かった。

今年（二〇一九年）は義元生誕五百年にあたり、静岡市では義元を再評価し、その名誉を回復する動きが進んでいる。

こうした動きに刺激され、私も戦国史研究の第一人者小和田哲男氏の著作を読んでみた。

氏の著作「今川義元」（ミネルヴァ書房）で、義元は、(1)卓越した領国経営、(2)すぐれた外交手腕、(3)高度な文化政策により、もっとも先進的な戦国大名の一人と位地づけられている。

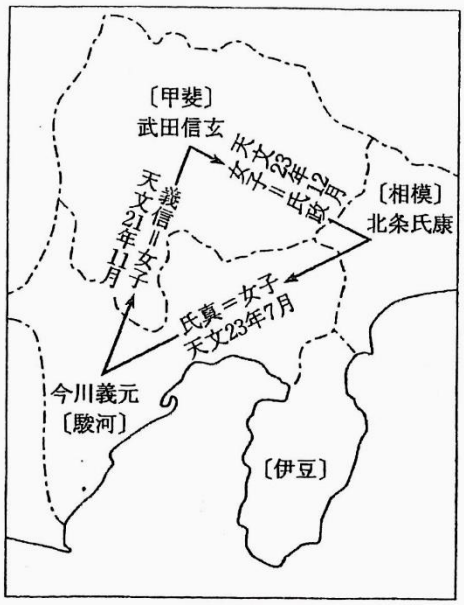
第一の領国経営でまず挙げられるのは、父今川氏親が制定した「今川仮名目録」の追加である。

これは単なる追加ではなく、中央公権力（幕府）からの完全な自立を意味しているという。

さらに、前代から始まった検地を進め、安倍川奥の金山開発、駿府をはじめとする商業振興策等で、石高は五十万石ほどであるが、その経済力は優に百万石に相当するものであった。

第二の外交政策では、背後の甲斐と伊豆・相模を安全にしておいて、三河からさらに尾張へと版図を拡げる方針を固めた。

甲相駿三国同盟である。（別図参照・前掲書による）



甲相駿三国同盟図

この三国同盟により、東海道の安全が確保され、物資輸送・商品流通のルートとしての役割が高まったことも見逃せない。

第三の文化政策では、義元治下の駿府は、越前一乗谷の朝倉氏、周防山口の大内氏と並んで、戦国三大文化の地と言われる。

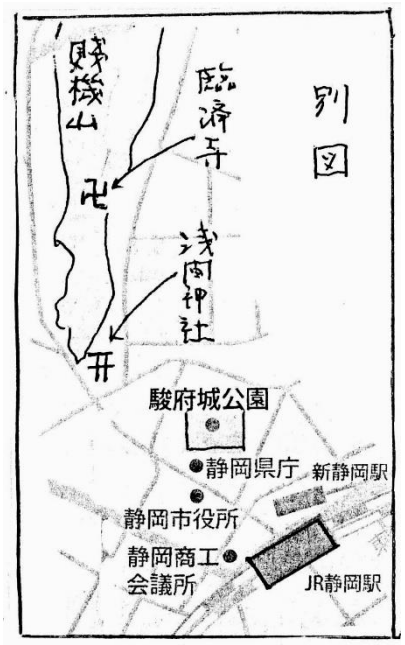
三つの文化の類似点は京都から公家を積極的に招いていることで、京都指向が強かった。

応仁の乱後疲弊した京都を逃れ、駿府を訪れた公家は今川氏によって生活を保証される礼として、当主義元やその子氏真、さらに重臣たちに和歌を教え、蹴鞠などを伝授した。

静岡に今も残る清水寺や愛宕山、丸山等の名は京都を意識したもので、今川氏の京都指向の強さを物語っている。

以上概観したように、義元の治世は、政治・経済・文化のいずれの面でも戦国大名として全国有数の高いレベルに達していたことは間違いない。

三月末、暖かい日ざしに誘われ、私はＪＲ静岡駅から北に向って、浅間神社→臨済寺と義元のゆかりの深い地を歩いてみた。（別図参照）



静岡駅から徒歩二十分で浅間神社に着く。
静岡市を見晴るかす賤機山の麓に位置するこの神社は、駿河国総社・富士新宮として古来崇敬されており、総漆塗・極彩色の壮大で美しい社殿群である。
この神威を背景にして領国支配を進める意識は義元にも強くみられた。
長兄・次兄の夭折後、家督をめぐる庶兄玄広恵探との争い(花蔵の乱)で勝利した後、国守としての最初の発給文書の宛先は、ここ浅間神社であった。
それは浅間神社の神事である流鏑馬の祭礼銭の徴収権を安堵したものであった。
境内を一巡したあと、賤機山麓の麻機街道を北に向った。
十五分ほどで臨済寺に着く。
この寺は臨済宗妙心寺派の禅寺で、専門道場として各地より修行僧が訪れる。
この日も境内には人影がなく、静寂の気が流れていた。
当山を開いた太原崇孚(雪斎)は義元の師であり、軍師でもあり、義元が駿・遠・三の太守として勇を振った裏には雪斎の功が大きかった。
この寺から駿府今川館(現在駿府城公園の一部)までは、南の方角へ直線距離で二キロ余り、歩いて三十分ほどで、二人が緊密な関係を保つには申し分のない距離であった。
人質時代の松平竹千代が雪斎から薫陶を受けたのもこの寺であった。

だが今川氏の全盛は長くはなかった。
義元の桶狭間の敗死は雪斎の死後、わずか六年後のことであった。
帰宅後、名古屋市の地図(昭文社)を拡げてみた。
永禄三年(一五六〇年)五月十九日、尾張に侵攻していた今川義元は五千人の本隊を率いて午前八時ごろ沓掛城を出て、西方の大高城に向った。
現在の地図から推しはかると、直線距離で十キロほどで、その中間に桶狭間山がある。
ここで義元は小休止に入った。
義元は馬ではなく、輿に乗っていたが、小和田氏の前掲書によれば、輿の使用は室町将軍家から地方有力大名に与えられた特権であり権威の象徴であった。
それにしても沓掛城から桶狭間山まではほぼ五キロほど、当時の天候や道路事情を考えても、余りにも緩慢な軍事行動であった。
すでに前夜先鋒の松平元康が大高城に兵糧を入れており、もし義元が早朝に沓掛城を発ち、昼ごろに大高城に入っていれば、兵力で劣る信長は手の打ちようがなかったのではないだろうか。
この日信長は早朝四時に清須城をとび出し、熱田神宮で兵を揃え、桶狭間に急行した。
現在の地図から推しはかると、合計二十二キロほどの強行軍である。
戦いは午前十一時ごろから二時間ほどで終ったという。
適確な情報に基づいた信長の果敢な行動と、緒戦の勝利もあってか悠然とした義元の行動の差が運命を分けた。
今川義元は卓越した戦国大名の一人でありながら、なお中世的な権威や慣行を重んじたが故に、非運の死をとげた。
今年五月十九日には義元の首が祀られている臨済寺と胴が祀られている大聖寺(愛知県豊川市)による合同法要が行われるという。

平成三十一年四月八日記

咸臨丸の事

長島節五

咸臨丸は黒船ペリー提督の来日によりあわてた幕府が一八五三年急遽オランダに注文した二艘の中のうちヤパン号が咸臨丸と命名された。中国の古典から「君臣互いに親しみ厚く、情けを持って互いに協力し合う」と云う意味らしい。（佐賀藩も咸臨丸と同じ型の電流丸という舟を注文し、その船底にバラストとして積んできた銑鉄で日本で始めて使用できる鋳鉄砲を鋳るのに成功した）

この船はオランダのホップ・スミット造船所で建造されヘレフートスライス海軍工廠艤装された軍艦である。当時の外輪船からスクリュウに転換したばかりの新鋭船である。一八〇七年米国のローバート・フルトンがハドソン河で人工動力による実用外輪蒸気船が人工動力船の始まりと云われている。スクリュウは一八三六年英国のスミスとスエーデンのエリクソンが特許を取得し、英海軍では一八四三年に建造されたラトラと云うスクリュウ船と外輪船アレクトとで綱引きを行い多くの人達の前でスクリュウの優位性を示した。そうした技術革新の時代、一八世紀の英国ではパドル方により鉄の大量生産が始まり、仏国ではエッフェルとなどが建造されだした時代でそろそろ鋼鉄船が造られようとする時代でもある。

オランダでは二〇〇〇年に日蘭交流四〇〇年記念に出された冊子に咸臨丸の事が記載されている。ヤパン号咸臨丸そのもの図面ではないが当時の姉妹艦などの図面が発見され、それによると全長四八・八㍍幅八・七四㍍排水量六二五屯で間違いない正確だと云うことになった。喫水線より上は黒いタールで塗られた木造船で、その下から船底部は銅板で葺かれ富士壺や海草の付着を銅イオンで防ぐようにしていた。機帆船と云っても帆で航行するのが主で、蒸気機関を使用するのは港湾内での接岸移動や無風時に使用するものであり、蒸気機関だけで航行出来るのはせいぜい七日も航行出来れば良い方である。従って帆走する際はスクリュウが航行の抵抗になるので、スクリュウ駆動軸を切り離し船尾甲板に容易く引き上げる機構構造になっている。此のスクリュウは直径二・九五㍍の木製の二枚羽で六ノットの航行速度で航海出来た。

ペリー艦隊が三浦半島の沖合に巨大な黒船四艘現れた。当時の日本の大型船、千石舟の大きさは二九メートルぐらいで百五〇屯程の船である。この時のサスケハナ号が七六・二㍍で三八二四屯だから当時の日本人がその巨大さにビックリしたことがわかる。その内二艘はただの帆船で、他の二艘ポーハタン号とサスケハナ号(スクリュウ式に成る前の最後の方になる外輪船)などが外輪船で帆走の場合は少なくとも水中に没する水掻板をいちいち取り外さなければならなかった。急な天候変化の場合は分かっていても大揺れに揺れる洋上では取り外す作業が出来ずしかたなしにそのまま航行していたようだ。

蒸気機関を作動させるときは、帆をたたみ収縮させていた煙突を高く引き延ばしてからボイラーを焚き、蒸気圧が規定の圧力に上がるまでには一時間半程はかかった。直ぐには蒸気圧は上がらず運転はできないのだ。ボイラーは二基横並びに船腹一杯に搭載され、各々三基の焚き口が有るから六口の焚き口が並んでいるボイラーで焚き屋火夫は大変だ。圧力は一・〇五kg程度だと言われ二気筒横置傾斜直動機関で一〇〇馬力程度の出力であった。燃料の石炭は七〇屯程は積めるが咸臨丸はそれ以上に甲板等にも無理やり積んだようだ。外燃往復運動機関なので、現在の殆どの自動車エンジンと同じだが、内燃機関であるからピストン上部から圧力を加える方式である、蒸気圧による往復運動機関はボイラーから供給されている蒸気圧ピストンを動かすが、弁の機械的連動作動によりピストンの上

部から圧力を加えてピストンが下部まで移動すると今度は蒸気を下部から入れ上部に向かってピストンを移動させる、この動きを連結棒(コネチングロット)でクランク軸を回転させてスクリュウ回転させる。一般の内燃機かのように片側からだけの圧力ではなくピストンの両側から交互に蒸気圧力かけて機関を動かしている。従って蒸気機関車と同じで機関の回転運動を一時停止させ連結棒の始動位置を任意の位置にすることにより回転方向を変えられるからバックギヤーはいらない。戦艦三笠も同じ蒸気に拠る往復運動機関であるから同じようにスクリュウを逆転できる。三笠の場合は当時最新鋭の三段膨脹型の往復運動蒸気機関英国製を使用している。膨脹型蒸気機関とは一度ピストンを動かすのに使用した蒸気を再度利用する方法で、四度利用する機関もできたがあまり良くないので流行らなかった。小型船舶では二段膨脹型が利用され、日本でも内燃機関が主流になって来たが、石油の供給が少ないので戦後も蒸気機関が利用されていた。あまり知られていないが蒸気機関車も排煙効率を上げるために、ピストンを動かした後の蒸気を使い排煙効果を良くしている。だから短い煙突でも排煙が出来るのだ。

咸臨丸は軍艦であるから三〇ポンドカロネート砲八門一二ポンド長カノン砲四門の一二門のほかに補助砲を六門も用意し、三艘の救命艇も搭載している。

一八六〇年二月四日品川を出港する咸臨丸には江川太郎左衛門が自分の江戸屋敷内に住まわせていた万次郎の才覚を知ってのことで、中濱と名付けたのは江川太郎左衛門である。その万次郎を通訳通弁士として乗船させたのは、船乗りとしての高い能力を知っていたからだ。「徳川幕府獅身中の虫」攘夷派の急先鋒水戸徳川斉昭は万次郎が米国で世話になった人間だからスパイの可能性がある等いらぬ詮索魔になって邪魔をしたが、木村摂津守は私が責任を以て監視するからと懇願して乗船の許可、日米修好通商条約批准の随伴艦の一員にする許可を得た。

上役保守派に取りいっていた勝麟太郎が選ばれてきたが、すでにその人柄や操船技能等を見抜いていた摂津守は勝等の反対意見を押し切って、ちょうど横浜に滞在していた米国海軍調査船フルモア・クーパー号の乗員が居ることを知り、ブルック大尉以下一〇名の船員を咸臨丸の乗員として向い入れ横浜港で乗船させた。

それに便乗してか随伴艦の情報を得た福沢諭吉は、幕府奥医師桂川甫周をとおして懇願、摂津守の従者と云うことにしてもらい、ねじ込んで乗船してしまった。

江戸湾は波静かな内海、勝麟太郎船長の下、スムウズに浦賀まで入港できた。鼻を高くした勝は、外蛮など当にすることはないと嘯いていた。最後の荷役の為、燃料食料飲料水等を積み込み二月九日サンフランシスコに向けての航海が始まった。

乗船者は軍艦奉行木村摂津守、教授方勝麟太郎以下八名、教授方手伝四名、通弁一名、操練所勤番公用方二名、医師及び門下生四名、奉行従者五名、教授方頭取従者一名、大工一名、鍛冶一名、水夫五〇名、火焚一五名、茶番二名の九六名とブルック大尉等一一名の計一〇七名の大所帯での航海になった。

江戸湾を抜け房総野島崎沖から東へ舵を切る大圏コースがサンフランシスコへの最短距離になる。ここからもう時化の大海原が延々と続くことになり、甲板を洗う波は三尺四尺を越え、傾くこと二七～八度さらに波涛高くなり四丈五丈と高くなり、波間に船影が見えなくなる程の大しけの中、万次郎は一晩中おきて米人水夫と会話をしながら時には歌など歌いながら繰船を続けたのだ。僅か日本人では中濱小野浜口の三名だけが船上での作業が出来るだけだった。

勝麟太郎艦長は己の職分も忘れ恐ろしさのあまり「救命ボートを下ろせ、俺は帰る」と喚き散らす有り様、その上瀬戸内の塩飽諸島から五〇名もの水夫達も恐れおののいて床に平伏すのみ、そのうえ帆の始末などの作業をテキパキと指示する中濱万次郎を逆恨みして、煩いから帆柱にロープで固縛しようとさえした。米人水夫達は揺れる船の帆柱へ縄梯子を使い帆の始末を日曜茶飯事の如く行うが、瀬戸内の沿岸航行の体験しかしていない水夫にとって経験したことのない時化が果てしなく続き、休憩することも食物を口にすることさえままならないのである。そのうえ右に左に前に後ろにと目まぐるしく揺れる甲板に撒く滑り止めの砂を搭載することも忘れてしまっていたんだ。塩飽の水夫の服装もミゾレ交じりの冷たい雨や波をやっと云うほど被りずぶ濡れ状態、此の時の気温は二度前後であるから体力の消耗が激しく、体は芯まで冷え切り病人の続出になってしまった。水夫達は延々とずぶ濡れ状態になることを想像もしていないから、綿の衣類ではで体温を奪われ病気になるのはあたりまえの状況だった。欧米の水夫や漁師はフイッシャマンセーターなどと云ってわざと脱脂していないゴアゴアした毛糸で編んだセイターを着込んでいるから、濡れた場合も線維が潰れることが無く吸水性も少なく、綿よりはるかに保温性が良いものだ。ようするにはなから何日にも渡って航海することなど想像想定が当時の日本人にとってはまったく出来ていないのだ。ましてや何の訓練も体験もしてこない漁師を何人連れてきても役には立たないのだ。彼等にとってはいきなり西洋の船に載せられ船上での生活、舟の使い勝手も理解出来ないまま乗船させられたのだ。当時の日本の船には便所は無い、千石舟弁財船等の大型船には垣立と云う囲が一尺チョット張り出している。この垣立に掴まり船縁との間に尻を出してホチャンと落下させるのだ。甲板から船底の間には板を敷いて置いてあるだけで防水性は無い。洋船は樽のような構造で雨や打ち付け甲板を洗うような水も入りづらい構造にしてある、和船は桶のような構造であるから水は簡単に入ってしまう、鎖国制度の下で沿岸航行専用に造られているからだ。船室から甲板に出る時も入る時も、その都度ハッチや扉の開け閉めをする習慣は無く閉める事を忘れ何度も海水を入てしまい、入り込んだ海水の抜き取り作業に追われ、そんなことが度々有り米人水夫にバカにされる有り様だ。羅針盤や航海図作製室のある会議室や高官室の上部天井はガラス張りのスカイライトで明り取りになっているがそこに腰かけたのか手を付いたのか破損させてしまった。応急処置で水が入らないようにしたため暗くなり羅針盤は見づらく航海図の作図もしづらくなってしまった。これも当時の庶民は板ガラスの存在を知らなかったからなのだろう。

悪天候の中船酔いで食欲もなく、揺れに揺れる船上では火を使用した炊事は出来ず、ホシイを仕方無しに噛みしめ喰うが喉を通りずらく、蕎麦粉を水で溶き無理やりに胃に流し込むような状態が続いた。色々な食材食品も十分すぎるほどに積み込んだが、防水のことを配慮した梱包荷づくりが出来ていない、水浸しになり腐り悪臭を放つありさま、大半を洋上投棄することになった。見た事もない先進国への希望をいだいて胸ふくらませた長い旅路の為に用意した嗜好品も大半は海の藻屑となってしまった。何時果てるとも知らないなすすべもなく火鉢を囲み煙管でタバコを燻らし時間がたつのを待つしかないのが現状だ。

往路も後半の海路はかなりおだやかになってきたが、帆柱は三本のうち二本も折れ、搭載してある三艘の救命艇は確りと固縛しているはずだったのが、一艘は流されてしまっていた。帆布はズタズタに破れ吹き飛んでしまったものもずいぶんあり、ロープ類もかなりの損傷を受けた。咸臨丸は総身創痍で難破船に近い状態だった。濡れた衣類や寝具を干

し、破れた帆布を繕いをしている中、米人水夫が自分の衣類を真水で洗濯するのを日本人の従者が気づき、「掟破りめ」と云うことで蹴り飛ばしてしまった。怒った米人水夫は部屋に戻りピストルを持って仲間の水夫を連れてきた、こちらも刀を持って身構え睨みあい一触即発の騒ぎになった。騒ぎを聞きつけてブルック大尉や万次郎や摂津守も出てくる大騒ぎになった。詳細を知ったブルック大尉は、非は米人水夫にあるから斬り捨てても良い、斬りなさいと云ったため武士道に通じる所を感じてかシーマンシプの心意気にほだされ矛を収めた、それ以来反目し合っていた日米の乗組員水夫達は互いを気遣いできるようになった。長い航海での飲料水真水は各人平等に一日の使用が定められ、容器の蓋には鍵がかけられている。

名目は勝麟太郎艦長だが実際現実ほとんど艦長室のベットに横たわって居る日々が殆どでありブルック大尉が艦長役をしなければ船は進まないのである。限られた空間の中で規則が全てで艦長は絶対責任者で管理者であり命令者である。

この航海での最高責任者は木村摂津守だがこの時点では日本にはまだ船長だの艦長だの航海士だの水夫だのと正式な階級制度等ないので便宜上、艦長の上にあたる位地の最高責任者は摂津守であるから、ブルック大尉は提督呼んでいた。木村摂津守は家柄も良く浜御殿(現浜離宮)の管理を任せられる家柄で、休息保養に来る将軍との会話が出来たようであり、気使い気配りの出来る人間で七つも年上で身分位の低いハッタリ屋の勝麟太郎などを束ねなければならないから、此の気使いは大変だったことは想像出来る。

木村摂津守も小野友五郎も勝麟太郎も長崎海軍伝習所で学んだはずであるが、勝麟太郎は二回も落第し三回目には伝習所が解散してしまっているから、そのうやむやになったことに乗じてか、幕府の上司に取り入りこの日米修好通商条約批准の随伴艦企画に入り込んだ事は想像に難くない。勝が艦長役にならなくとも榎本武揚や中島三郎助など優秀な人材がいるのだから彼等が乗船すればよりよい航海が出来ことであろう。

中濱万次郎はただの遭難者だったが、救助してくれた米国捕鯨母船ジョン。ハウランド号のホイットフイールド船長に見込まれ、米国東海岸の船長の自宅で、我子のように育てられ高等教育まで受けさせてもらい、そして航海士資格を取得した。実際五年間も捕鯨船の航海士として乗り込だ実務経験があり、「ボーデイッチの航海書」の和訳もしている。この頃のマサチューセッ州ボストンの南ヘェアヘブンには三〇〇隻以上の捕鯨船が所属しており、鯨の脂身取りの航海に出ていた。一回出ると二～三年は帰らず、鯨の脂身だけ取り樽に詰め船倉が一杯になるまで帰らないで航海を続けるのだ。電灯やガス灯が普及していない時代、夜の明かりはランプかロウソクの明かりが主だった。このため欧米諸国は競ってロウソクの材料になる鯨の脂身取りだけの捕鯨競争をしていたのだ。通弁士として乗り込んだ万次郎は船乗りとして高度な技術と経験の持ち主でもあるが、咸臨丸の船内では日米間の通訳もそうとうな気配り気使いの絶えない日々であったことは想像出来る。

今と違ってＧＰＳも気象情報もなく、羅針盤と気圧計温度計と天体観測六分儀と時計砂時計なども使用して目的地に向かうのだ、あとは経験による観天望気で気象変化を予測して航海するしかないのだ。

往路もそろそろ終盤に近くなり、アメリカ大陸西海岸の山々が見えてくる頃だと小野友五郎が航海図を引きながら云った、その通り延々と続く海原の東の彼方に、山波らしきものが微かに見えてきた。これにはブルック大尉もその日時時間の正確さにびっくりした。名目だけの艦長、勝も思わず「君の卓越なる航海術に感服したり」と云った。

「軍旗を退けた連隊長」

～ノモンハン事件に見る指揮官像～

須見　隆

太平洋戦争の始まる二年前、「ノモンハン事件」と呼ばれる、モンゴルと満州の国境紛争事件があった。日本の主力として参加した関東軍の二三師団は、機械化したソ連とモンゴル軍を相手に戦い、五月から九月までに参加した人員一五一四〇人中、戦死五〇七〇人、戦傷五三四八人、戦病七〇六人、計一一一二二人（七十三％）の損害を出した、昭和戦史の中でも特筆すべき悲惨な戦いである。

私の祖父須見新一郎は当時、関東軍の第七師団第二六連隊の連隊長であったが、六月二十日ノモンハンへの応急派兵下命から九月十五日の停戦まで、二三師団に派遣され、連隊を指揮した。この戦いは近年、関東軍の参謀や上層部の指揮官たちが、大局的な判断もできず、無理な戦闘ばかりを命令した悪例として取り沙汰されることが多い。

しかし今回、この時七師団を率いていた園部師団長と七師団から応援で二三師団に派遣された祖父のエピソードより、当時の日本陸軍の中にも、まだ冷静に大局を見て判断しようとした指揮官がいたことを、七月三日未明から五日早までの戦いを事例に紹介したい。

当時の日本と満州国はモンゴルとの国境について、ハルハ河を国境と主張していたが、モンゴルとソ連側は、ハルハ河から満州側に入ったノモンハン地域を国境と主張し激しく争っていた。

七月三日、二三師団主力と二六連隊は、「ハルハ河に舟橋を架け左岸のモンゴル側に渡り、満州領内に布陣したソ連・モンゴル連合軍を背後から攻撃すべし」という命令を受け、作戦を進めていた。当初は夜中に架橋し、未明には全軍河を渡り切る予定であったが、昼近くになっても渡河は完了しなかった。二六連隊も全員が自動車に乗り込み、いち早く敵の背後に回る命令を受けていたが、一大隊だけが渡河を完了した時点で命令が変わり、一大隊だけ自動車で進み当初の命令を実行、残りの二大隊は徒歩で進むこととなった。

三日の昼頃、二六連隊は、前進を開始した直後にソ連・モンゴル連合軍の戦車・装甲車と遭遇。この方面の戦闘で、ソ連・モンゴル側は、戦車一三七両のうち七七両、装甲車五九両のうち三七両を失ったが、二六連隊も三日から五日の戦闘で第一大隊長、第三大隊長、連隊副官以下戦死一四三名、戦傷二七八名の犠牲を出した。須見は三日の戦闘で、肉薄攻撃班が至近距離で火炎瓶をソ連戦車に投げつけるような混戦を経験。このままでは何があろうと死守すべき連隊旗に危険が及ぶと判断し、一度自隊と共にハルハ河を渡した連隊旗を、四日対岸に戻し安全を確保した。その後、師団命令により五日にハルハ河敵岸より満州国側に撤退した直後、須見は七師団園部師団長からの伝言を聞くことになるが、それは「できれば連隊旗はハルハ河を渡さず後方に托して置け。」との内容であった。

一般的には、軍旗（連隊旗）は常に連隊と行動を共にし、激戦の中では体を張って軍旗を守り抜くものとのイメージがある。しかし、考えてみれば所詮は旗なので、激戦の中で旗を守るために行動が制約され自由な戦いが出来ないのであれば、後方の安全な場所に保管しておく方が合理的というものである。奇しくも園部師団長とその部下である須見は、同じ事を考え、そのように実行した。

それに対して、たまたま四日に二六連隊の本部に顔を見せた関東軍の辻参謀は、軍旗を後方に避難させていた須見を激しく非難した。辻の論法からすれば、戦況がどんなに厳しくとも、軍旗を先頭に戦い抜く精神力があれば、必ずや日本軍が勝利する、ということなのであろう。今考えれば何の合理的根拠もない考えだが、この様な考えを持つ威勢の良い軍人が幅を効かした組織構造、推して知るべしである。

ノモンハン事件の敗戦後、須見は予備役となる一方で、辻参謀は大した処分も受けず、二年後の太平洋戦争の際には、初期のマレー半島戦や、戦局の転換点となったガ島戦等の主要な作戦の参謀となり作戦を指導。ノモンハン事件後作戦を指導した師団長や参謀なども大した処分を受けず、その責任は、第一線で戦いを指揮した連隊長などの現場指揮官に向けられた。

太平洋戦争の敗戦理由は一言で語れるものではなかろうが、ノモンハン事件の敗因分析や教訓等を活かすことなく、ただ自軍の勝利のみ妄信する威勢ばかりの良い軍人が、その後も軍を指揮したことも、大きな要因であろう。

最後に、昭和十四年七月十日付の園部師団長から須見に充てた親書の内容の一部を紹介したい。

（前略）又軍旗は要すれば渡河せしめられざるを希望する旨、大兄に申伝へしめんとする外、何ら他意ありしにあらず。真に子を思う親心のみなり、御諒察願入り候。小生がハルハ河の渡河を非常に無謀と思ったのは、

第一、上司の此の作戦は行き当たりばったり、寸分も計画らしき所なきの感を深くした事

第二、敵は基地に近く我は遠く、敵は準備完全我は出鱈目なる様に思われ、

第三、敵は装備優良我は全く裸体なり、

第四、作戦地の関係上、ノモンハンの敵は大敵なり。然るにも拘わらず、上司は之を侮って殆ど眼中に置かざる態度なり（後略）

余白がありますので、ウィキペディア記載の須見連隊長の略歴を次に示す。

須見新一郎

東京府出身。一九一三年五月、陸軍士官学校（第二五期）を卒業し、同年十二月、陸軍歩兵少尉任官。一九二二年十一月、陸軍大学校（第三四期）を卒業し陸軍省軍務局歩兵課に配属。一九三五年十二月、黒河省の黒河特務機関長に就任。綏芬河特務機関長に転任。一九三七年八月、歩兵大佐に進み麻布連隊区司令官に就任。一九三八年七月、歩兵第二六連隊長となる。ノモンハン事件後、一九三九年十二月一日、待命、同月二十日に予備役編入となる。

戦後は公職追放を経て、長野県上山田温泉三楽荘主人。

天皇陵平面企画に見られる

『上古幾何学の計算』と『磁針方位』

（19・5会誌最終回に向けて総括）

高橋　正彦

【A―緒言】古代天皇陵に如何なる基本原理(尺度・幾何学)が認められるか、を論ずる為には確実なデータを提示する必要がある。

この為には陵墓に【明確・確実な測点】の存在を実証する必要がある。

昨年末より拙著『歴・帝紀・記年法』の復刻を準備しているが、陵墓の基本原理の右事実に関し、大幅な書き換え・新事実発見があったので、本会最終回の総括として、その一例を、崇神陵に限定して紹介する。

――――――――

なを右著は、『陵平面図(図B)の、曲尺PAD(PBC)と軸線は磁北と真北基準方位で作図され、その角度の偏移は磁針の年偏移(図D)を記録する』(仮説)と主張する。

――――――――

【B―明確な測点】とは以下の通りである

①濠水際部に真円に八角状の弱突出があり、その弱線1本内側を【円周】と確定する。

――茲より中心点【P】は確定する(図A)―

②前期古墳外周には準平面部(テラス=図A斜線部)が付随し、その内側に急斜面(陵体)が接し、その方部の角点C・Dは確定される。

③右2点より円Pに至る

接点【A・B】、軸線【PR】が決まる。

――――――――

【C―仮説の検証　――　その特例】

崇神陵の作図過程は、図Bの通りと仮説される。

――　真北4時方位に向け規尺PBCを作図する。(BC=2R)。次いで、磁北基準8時方位に向け、規尺PABを作図。(AD=2R)　Aの位置は磁針の偏移に合わせ↑印方向に偏移する場合(偏角が0からw10度偏移)Dの位置はD'に、方部幅はCDからCD'に変移する。

図Bから明らかな様に、崇神以降の伝統的作図法でPA(又はPB)に当時の磁針の偏移角度を記銘する際に、偏角がw±10度以内である場合、CD幅が狭く陵形は珍奇になる。

C＝①不審　従って崇神陵の年代に、仮に磁北の位置が図Dの様(w10度内)である場合、先の方法では作図できない。この観点から図Aの崇神陵のPB・PAの方位角度を読むと、その偏角は図Dの☆の通りで合わない。BCの長さの誤差も腑に落ちない。

これ等は作図の基本線でないのではないか。

C＝②補完作図法　これに対し軸線に注視する。PD=13/6Rと見ると精度が高い(誤差0.04%)。そこで軸線作図法を考察する。

――――――――

この際の和算の『設問』は次の通りである。

【円心から距離yの点Rから垂線＝xをあげ、CよりPに接線＝Zを引く。この時、**Z=2となる割りの良いx・yを解け**】

――――――――となる。

これを▽PRC△PBCに関する勾股弦法(ピタゴラス定理)と代数で解くと―――

―――辺PCは2者に共通につき―――

$X^2+Y^2 = (PC)^2 = 2^2 + 1^2$

よって $\boxed{X^2 + Y^2 = 5}$　であり、

これを図で解くと、【図C】の様になり、

Xを1～0.5の間に限定すると、

最も割の良いY値は2.1666(=13/6)であり、

13/6は意味ある重要な長さと判明する。

……

C＝③崇神陵に特有な補完的作図法

図Cで明らかであるが、X=1の時、Y=2となる。これはCD=2　とした場合、自動的に接線(CB)=2が作図される事を意味する。

然るに、陵設計者はこの様な安直は避け、【方部幅を半径より若干狭め、方部長は2ではなく、2に対し1/6増しを選択した。】

―――そこには明確な意図が認められる。

(恐らく軸線の偏角w2度は磁針を示す。)

ーー D 崇神陵平面企画の総括 ーーー

崇神陵は軸線を磁針方位 =辰ｗ2度= に取る特殊な平面企画で設計された。方部長は 13/6R(R=半径)の特殊な寸法である。CR=0.567R は敢えて数値計算により、CB=2R となる様に点 C の位置が設定されている。(PR が基本線として設定され、方部長誤差は 0.04%で諸基本線の中で最も精度が高い。)

ーーE 古代の幾何学計算の再現ーー

天皇陵墓において、△ＰＢＣを骨格規尺とする勾股弦法の定式計算法があったと推定される。

(箸墓の場合 BC=2.5r :4 分勾配,PR=2.5r)この定型された規矩(△PBC)を、平面図に正確に描画するためには、図Ｂの如き△PBC・△PCR を組み合わせた勾股弦法の計算を行い、図Ｃの如き関係式を前提に、ｘｙの配分を算出するのが、最も自然である。

【y は 13/6R と求めた確実な長さである場合、そこには基本単位の情報があると思われる】

⇔上左(2種方位による作図) ▲XY相関
←磁北の経年変化 (AD300頃偏角0°)

本論の趣旨 崇神陵の軸線(左図●W２°)は磁針基準方位ではないか。偏角微小な場合、是を接線方位として作図はできない。この様な特殊な状況の場合、非伝統的な陵形の作図法が採用された。